

# 藤原京、平城京遷都以前に 設けられた 古代官道を訪ねて

平城京遷都1300年で盛り上がる奈良。しかし、遙か以前に16年間続いた藤原京の時代と、多くの人や物資が行き交った古代三道(上ツ道・中ツ道・下ツ道)については、今もその全容が明らかになっていません。日本史上最初で最大の条坊制<sup>※1</sup>を採用した藤原京と、時期を同じくして再整備されたと言われる古道の歴史を通じて、当時の土木の歴史と工夫を振り返ってみましょう。

①～⑤はCGで再現された藤原京  
(画像提供・福原市・奈良産業大学)

## PART I しびる“想像劇場”

### 高速道路以上の規模だった?古代官道 大動脈整備で、平城京遷都を実現せよ

#### ●● 中国の都とは異なっていた藤原京

「中国の伝統的な都づくりに基づき、ほんの十年ほど前に完成させたばかりの藤原京が、現時点でもう新しくないなんて…」

704年、中国から帰国した遣唐使・粟田真人から、思いもよらぬ報告を受けた朝廷の落胆は大きかった。日本初の本格的な都として、唐の里坊制<sup>※2</sup>を取り入れ、古代王朝・周などを参考にしてつくられた藤原京。唐の都市づくりは、その遙か先を進んでいるものだった。

当時、周辺国を制圧していた唐に対し、わが国は互いに理解し合える文明国として威厳と親愛を示すことで、かつて(663年、朝鮮半島の白村江の戦いで唐に敗れた大和政権・倭国)のイメージを一新し、攻め込まれないよう交流を維持しておく必要があった。

藤原京は律令(法令)で国を統治する国家体制の集大成といえるものであったが、さらなる都城の進化が急務となった。

※1 南北中央に朱雀大路を配し、南北の大路(桑)と東西の大路(坊)を基盤の目状にした左右対称の「都市設計」。  
※2 古代から中世後期にかけて行われた土地区画制度。基本単位は約109mに区分された正方形。

#### ●● 古代官道の再整備が決定

「遷都が決定した。早々に造営にかかれ」  
前年、文武天皇から要請を受け検討されていた平城京遷都が、元明天皇の詔により708年に正式決定。藤原鎌足の次男・藤原不比等の指揮により、平城京遷都プロジェクトが始動した。

「予定地は藤原京の北約40里<sup>※3</sup>。まずは陸路整備だ。藤原京から北へ延びる三本の縦貫道を拡張せよ」

実は新たに都を設ける場所には、古代官道が以前から奈良盆地を南北一直線に縦貫(東から順に上ツ道・中ツ道・下ツ道=大和大道とも呼ばれた)して存在していた。この古代官道の歴史は、藤原京の成立前、さらに言えば壬申の乱(653年)以前にまで遡る。用途として、飛鳥盆地や周辺丘陵部での宮殿、寺院、貴族の邸宅などを造営する際の運搬道として、また、戦闘時に大量の兵力を動かす戦(いくさ)道として欠かせないものだった。

※3 当時の1里は約500m。

藤原京成立以前からつくられていた3本の古道。  
(下ツ道を基準に2.1km間隔で造られたとされる)



③



④



⑤



平成15年、藤原京内で発掘された中ツ道跡。南側中央には香久山が見える  
藤原京時代に拡張工事が実施されていた

#### ●● 解体・移築される建築物

平城京は東西約5km、南北約6km。藤原京同様、広大な敷地に縦横の通りを巡らせる条坊制<sup>じょうぼうせい</sup>ではあるが、長安の配置に習い、天皇は北側に座して南を眺める「天子南面<sup>てんしなんめん</sup>」の思想を基本とした。当時最先端の天文の知識を測量に用いて、道路の中心線を割り出し、尺を単位とするさまざまな測量機器を活用して道路整備を行うことになった。

「大和大道はいずれも平城京とつながる形にしよう。特に下ツ道は、藤原京から平城京の朱雀大路までを結ぶ主要街道としての役割を持たせよう」

「藤原京遷都からまだ日が浅いので、どの建物も比較的新しい。そのまま残して移るのはもったいないぞ。建物を解体し、瓦や柱などの木材、敷石も平城京に運び、再利用で効率化を図ろう」

今後、人・モノの往来が、一層激しくなることを想定しての判断だった。

#### ●● 大和大道を高速道路並みに

工事は急ピッチで進められた。当時の道づくりは側溝を設けることから始まるのが通例だった。拡張工事によって、中ツ道は当初約16mだった道幅を約28mにまで拡張。下ツ道も約24mと現代の高速道路を彷彿させるものとなった。

「おっと、あの荷台の大きな屋根組みも宮殿の一部かな」汗だくになり、鍬や鋤などを使って工事を進める者達の横を、牛や馬で引かれる運搬台車が何列にも連なり次々と砂煙を上げて走っていく。通行量は尋常ではなかったが、約2.1km間隔で便利な三本の運搬ルートがあるため、

#### ●● 運河も張り巡らされていた平城京

「水路の整備は進んでいるか。生活水の確保や、市場に運ぶ食材などの流通を早く円滑にしておくは」

平城京の中を通る大和大道の大路や区画道路の側溝には、下水路、排水路の役割があった。一部は自然の河川とつながる物資運搬用水上交通網として大いに活用された。堀河、秋篠川なども、平城京内の官営市場に物資を運ぶため造成工事が加えられた<sup>※4</sup>。陸路に比べ、労力や時間がかからない水路を整備することにより、河川は人工的な運河へと形を変えていった。

※4 現在の佐保川、秋篠川の流路は人工的に変えられ西堀河と呼ばれた(「今昔物語」より)。また、東市の西を流れる東堀河があり、京内の基幹排水路として物資運搬機能を果たしていたという記述が残っている。(「東西市庄解」756年)その後、東堀河は発掘調査で幅・深さともに約10m前後と判明。

#### ●● 次の遷都へ——土木の進化は続く

そして710年、平城京遷都。徐々に都が造られていった。まちの中央を貫く朱雀大路は、平城宮の羅城門から朱雀門までの4kmを結ぶ平城京のメインストリートであり、その道幅は約74m(大阪の御堂筋で44m)に達した。平城京に都を移した理由は、藤原京のあった飛鳥地方の豪族の影響を避けるとともに、外交・交通の利便性を重視したため。また、土木技術はより緻密な測量が可能になったことから、高精度設計に基づく理想の都造りを試みたのだとも言われている。

この物語は史実をもとに再現したものです。

～古代官道をたどる～

# 在りし日に思いを馳せて、旧路散策



奈良県橿原市の丸山古墳近くから、奈良市の平城京・羅城門までほぼ真南北に走る下ツ道。当時、藤原京から平城京へと移っていった人々の気持ちで、その推定位置をたどりました。

大極殿跡から南を眺める。4つの門の礎石と列柱が再現されている



## ● 藤原京跡で都の大きさを再認識

現在、奈良盆地を南北に縦貫する幹線道路は国道169号、国道24号の2本のみ。まず丸山古墳をスタート地点に国道169号を北上しました。北に進むと「かしはら万葉ホール」の隣に下ツ道跡の碑が。ここから東の藤原宮跡へと向かいました。

藤原宮跡には土壇、宮跡の4つの門と礎石と列柱の一部が残されていました。藤原京は平城京以上の規模だったことが、これまでの調査で判明しており、周囲に見える大和三山(香具山、耳成山、畝傍山)が中にすっぽり収まるほどの広さだったことを想像するだけでも、ロマンを感じずにはいられません。当時、日本一大きな建物だったという大極殿跡に立つと、古代の衣装をまとった人々の姿が目に見えそうです。



小房町の国道沿いにある下ツ道跡の碑。現在も発掘調査は継続中



古い民家が残る八木町界隈

## ● 下ツ道・横大路の交差点を発見

藤原宮跡を出て、平城京へと向かう下ツ道に入りました。当然ながら、下ツ道としてそのまま残っている道は皆無です。過去約1300年もの間の変遷で、場所によっては建物で道そのものがなくなり、通れない所も多々あります。

広い国道から、下ツ道と重なっている小道に入りました。北へ向かうメインストリートが今はこんな細道に…と思いつつ、飛鳥川を渡ると、昔風の家並みが広がってきました。JR桜井線の踏切を渡り、北八木町へ。道の中央に十字路交差の印を発見。多くの車や人が東西に行き交う横大路です。当時の横大路の道幅は約30～40mとされており、言ってみれば現代の国道1号のようなもの。下ツ道以外の中ツ道、上ツ道とも交差していたので、交通量が多い幹線道路だったはず。中世には、この交差点を中心にまちが形成され、近世になると高札場になり、札の辻と呼ばれるようになったそうです。



道沿いには松尾芭蕉の句碑も



今は小さな交差点、かつては下ツ道、横大路が交差する大道だった。江戸時代、高札場だった場所には古い旅宿屋の建物が残る



一字一石塔



## ● 水路の発達が環濠集落を形成

さらに、初瀬川と並行しながら北上。当時はまっすぐに延びていた道が、現在のはくねくねと続く曲線になっています。稲荷神社、新町の古い家並みを過ぎ、天理市内へ。少し東を国道24号が並行していますが、そのままコースをたどれるので直進し、一字一石塔<sup>※5</sup>に到着。橋の上から大和川を見下ろすことができました。おそらく当時とは異なる流路なのでしょうが、陸路・水路の両方で物資や資材を運んでいたことが想像できました。

大和郡山市に入り、平野部に多く造られた中世の環濠集落<sup>※6</sup>の遺構の一つ、稗田環濠集落を見学。生活用水の確保と外敵を防ぐため、村の周囲に張り巡らせた濠が今も残されていました。(また、当時は平城京あたりまで田園が続いていたらしいことも、周囲の景観から想像されました。)

※5 通常は紙に書き写す経文を、一文字ずつ石に書き写した碑。願い主が目的の成就を願う。  
※6 外敵を防ぐために村の周囲に濠を巡らせた集落。



一字一石塔のある下ツ道から西を眺めると、大和川越しに京奈和自動車道が見られる



総合治水対策の一環でもある環濠集落。平安末期から室町時代、奈良盆地には170余りの集落が形成されていた



羅城門跡の礎石。礎石は近くの佐保川の川底で見られている



再現された平城宮朱雀大路。道幅が広いので、復元された朱雀門が小さく見える

## ● そして、朱雀大路跡、平城京へ

奈良市内に入り、やっと平城京の表玄関・羅城門跡に到着。ここが下ツ道と、平城京の中央を南北に通る朱雀大路(道幅約74m)の南端の境目(実際の羅城門跡はすぐ近くの佐保川の川底にあり、礎石が発見されている)となっています。

さらに、かつて朱雀大路だったルートを進みますが、道が民家などで途切れてしまうため、やむなく迂回。大宮通りから朱雀大路跡へ入りました。案内版で東側溝、築地、雨落溝などが発掘された時の写真を確認。側溝の広さに驚きながら、朱雀門に向かい歩を進めます。朱雀大路を踏みしめるたび、この広い道を多くの人々が往来し、新たな都造りを行っていたのだという事実を体験しました。大きな歴史の分岐点で、快適な大都市をつくるための都市計画の必要性を実感できた旅でした。



平城京遷都1300年祭で多くの人々が来場した復元された第一次大極殿

取材協力: 橿原市 奈良文化財研究所(都城発掘調査部)  
参考資料: 平城京一三〇〇年「全検証」奈良の都を木簡からよみ解く(柏書房)  
平城遷都1300年祭公認ガイドブック 奈良歴史ロマンを歩く(三栄書房)  
サライ(2010年5月号)、続サライの奈良(小学館)  
奈良・大和路 観光地図帳 平城遷都1300年祭イベントガイド(山と溪谷社)